

2022年度第2回教育課程編成委員会 議事録

日 時： 2022年12月7日（水） 14:00～15:20
場 所： 愛仁会看護助産専門学校 2階会議室
出席者： 公益社団法人大阪府看護協会 前会長 高橋 弘枝
Office Kyo-shien 代表 池西 静江
社会医療法人愛仁会 愛仁会本部 看護担当特任理事 増山 路子
社会医療法人愛仁会 愛仁会本部 看護部長 西原 伸美
愛仁会看護助産専門学校 学校長 清水 富男
愛仁会看護助産専門学校 副学校長 木村 幸子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 教育主事 増本 綾子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 教育主事 小林 理絵
愛仁会看護助産専門学校 助産学科 教育主事 大石 有香
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 実習調整者 清水 弘子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 学科調整者 長嶺 洋子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 学科調整者 西山 玲子
愛仁会看護助産専門学校 事務部長 澤崎 隆志
愛仁会看護助産専門学校 事務 川口 璃子（書記）

議事次第

1. 学校長挨拶
2. 教育課程編成委員会規程について
3. 2022年度前期 教育課程報告

<学籍状況>

昨年度の退学者が増加したため、今年度は新入生全員にカウンセリング体験を実施し、悩みが出た際に教職員に相談する以外に外部カウンセラーに相談しやすいきっかけ作りに着手した。今年度のカウンセリング件数は昨年度に比べて増加傾向にあり、体験を通して学生がカウンセリングに行きやすくなり、また教員も学生をカウンセリングへ促すことができているのではないかとこの意見があがっている。

<教育計画>

退学者のほか、卒業生の早期離職者や休職者数が増加傾向にあることから、コロナ渦であっても教育の質を落とさないため対面授業の実施や、3学年がチームとして協働することでお互いを認め合い高め合う機会になることから特別教育活動（縦割り活動）を多く実施することに決定した。

また、休校となった場合でも学習環境の準備（iPad 電子テキストの導入）や、Teams アプリや健康ポータルソフトを活用することで、学校と学生が双方向に健康状況の確認・把握や指示指導がオンライン上でできるように ICT の環境整備も進めている。結果、学生の健康状況の確認や、急な時間割変更や課題・レポート提出なども自宅からでもスムーズに行えるようになった。健康状態により臨地実習参加を中断せざるを得なくなった場合でも、学校と病棟をオンラインでつないでカンファレンスに参加することができるようになったことで学習機会を保障できた。また、より臨床の電子カルテに近い形式で模擬患者情報が収集できる教材（MEDI-EYE）を導入することでタイムリーな情報収集と学習機会を増やすことができた。

<新カリキュラム 講義関連>

基礎分野「エンパワメント演習」は、看護職としての目的達成のために自己肯定感を高め、自分をエンパワーする能力を獲得するといった思考のトレーニングに重きを置いている。この科目の導入によって、就職前後のギャップにより辞めていく学生を減らしていきたいと取り組んでいる。また、専門基礎分野では根拠をもって看護に活かし、考えることができるよう解剖生理学を看護形態機能学と合わせて教える（医師が担当する分野を続けて看護職が引き継ぐ）科目に変更した。

<新カリキュラム 実習関連>

「ヘルスプロモーション実習」は、さまざまな年代、あらゆる場所で行われる予防を含めた看護について学ぶ実習である。昨年度の会議で「対象が小児・老年に偏っている」といただいた意見を参考に、成人期を対象とする産業看護の領域にある実習先に交渉を行った。辞退する企業もあったが、働く人々の健康を守るために看護職介入の効果と意義を訴えるように交渉することで、明治製菓から承諾を得ることができ、成人期を対象の理解と予防看護を学ぶ機会を得ることができた。また、青年期を対象とする場として、大学と現在交渉中である。今後は様々な場と対象の健康についての学生の学びを、どのように共有・統合させ、評価していくのか検討していく。

「入退院支援・外来実習」は、夏季に4か所の病院に専任教員を研修に派遣し、入退院支援室や地域連携室・外来における看護について学んでいる。

<新カリキュラム 縦割教育活動>

「SDGs 活動」のねらいは、各グループで年間を通して活動を行い、地域・社会貢献と看護師の役割について考えることである。この縦割り教育活動は、3学年が一緒に同じ目的を達成するために報告・相談・連絡しながら共同で取り組む内容となっている。卒業生の9割が愛仁会系列の病院に就職し、活動を共にした先輩が就職先にもいることで安心感も生まれることから、新人看護師の早期離職予防にも効果があると考えられる。ただ、評価のない活動に対する参加の熱意は学生さまさまであり、目的や意義の共有化や十分な動機付けが、学生と教員共に必要だと感じている。

<登校日数について>

➤昨年度

専門科目が増える2年生や実習を優先する3年生の登校を優先させたため、昨年の1年生は前期の登校日数が26日と少なく、ほぼオンラインでの学習であった。縦割り活動は中止もしくは縮小され、対面ではなくオンライン開催となり、クラス作りや交友関係を作る機会が少なかった。

➤今年度

昨年1年生の登校日数が26%であったが今年度は89%となり、2・3年生においても増加した。対面教育の機会を増やし、コロナ第7派においても一斉に授業が中断されることなく、休んだ学生に対してもオンライン授業の充実によって学習保障ができた。また、今年度前期には特別教育活動の一つである新入生歓迎会を2年ぶりに対面で開催でき、実習オリエンテーション、技術伝達や看護の日などを含めた縦割り活動で他学年との交流を通じたチーム活動を学ぶことができるようになってきている。講義担当の教員からは、「昨年の1年生と比べて今年の1年生はグループワークでの発言や進行がスムーズで、クラスのまとまりも良い」との意見も出ている。

<実習状況>

昨年度は新型コロナウイルス感染症のピークがあり、実習期間すべてのグループが一斉に学内実習となる実習が多い状況であった。今年度は実習が一斉に止まることなく、感染が拡大しつつある病棟での実習のみ一時中断されるようになったが、病棟変更を行うなどの調整を行い実習が継続できるよう努めたため、昨年度より学内実習は少ない状況となっている。

4. 意見交換

(委員) コロナ禍においても対面授業や実習を行うことができおり、良い状況である。前期の学籍状況について、再履修者はどのような学生であるか。

(学校) 当該年度に単位を取得できず次年度に再履修する学生であり、科目ではなく人数を表記している。

➡再履修者の人数が少なく、優秀である。

5. 特別教育活動「SDG s 活動」進捗状況と課題の報告

目的：社会全体で取り組むべき SDG s について、学校全体で活動することで SDG s に対する理解・関心を高め、社会（地域）貢献につなげる。また、活動を通して学生間の主体性・協調性を育成する。

目標：1. SDG s とは何か、SDG s の成り立ちや考え方、概要について、学校全体で理解できる。
2. 社会の一員および学生として取り組む活動を計画し、年間を通して協力し合い実践できる。
3. 活動状況を学内で共有し、SDG s に対する理解と関心を深め、持続可能な活動につなげる。

なぜ看護学生が今この活動をしなければならないのかについて、十分理解させるための導入説明が不足していたと感じている。カリキュラムに設定されているから仕方なくというような受け止めの学生が多く、負担のかからない活動のテーマを選択しようとする様子や面倒だと感じている態度が開始当初には見受けられた。

また、教員の多くも3学年が協力し目標達成をすることは看護教育において必要だと感じているが、「SDGs 活動」についてカリキュラム改正時の検討が不十分であったため、実施することを最優先とし、学生任せの部分が見受けられた。そこで、特別教科外活動チームの専任教員が学生の興味関心や理解を高めるためにビデオ学習に臨み、イメージをより具体化させることに焦点を当てることから始めた。

「SDGs 活動」のねらいは、単なる活動の理解ではなく、活動を通じて地域や地域に暮らす人々の暮らしに学生が関わることで理解を深めていくことである。そして、人々の健康な暮らしを守るために、地域の中での看護師としての役割の自覚や自信を持ってほしい。重要なのは、リサイクル用品の活動などの成果を上げるだけでなく、関与することによって地域の人々の暮らしの実態を感じることであり、また看護職となる自身の持てる力に気づいてもらうことである。また、グループワーク活動に苦手意識を持つ学生が多く感じることから、この活動は価値観の異なる相手と共同する方法について上級生から学ぶ良い機会となるが、3年生は実習もあることから難しい状況が課題となっている。

➤指導計画

担当教員がうまく学生の力を引き出し、メンバーシップやリーダーシップ・協働といった向上目標の学びにつなげてほしいが、やはり「SDGs 活動」の成果達成に焦点が当たっていることが見受けられるため、他のグループの活動経過を知ることによって学びを深めるためにも、中間評価会を行うことにした。

➤テーマの報告（一例）

- ・子ども食堂ボランティア
- ・コンタクトレンズケースは地球を救う
- ・傘のリサイクル
- ・フードロスを減らそう
- ・地域の清掃活動に参加して
- ・ペットボトルからはじまる健康福祉活動の促進

6. 意見交換

(委員) 看護学校において学生の主体的な活動は素晴らしく、もっと発信してほしい。

基礎看護教育における「SDGs 活動」であると思うが、看護職としての意味・意義をおさえて、まとめていくことが重要である。

(委員) 「SDGs 活動」の目標が広がっており、学年を超える教育活動の意義につながっているのかが見えにくい。学年を超えることに狙いを定めるのか、科目に位置づけるのかを整理する方が良い。

(委員) 縦割り活動の目的・目標の明確化する必要がある。単に行事を一緒にやるだけではなく、どのような視点でチームの一員として動いていくのかを考えさせることが大切になってくる。企業交渉の際、学生に看護における、どのような能力をどのように見せたいのか明確にすればアプローチの仕方が変わってくるのではないかと、また学生の気づきが変わってくるのではないかと。

(学校) 企業交渉の際に学校の目標が不明瞭なまま説明しており、企業も初めての取り組みで戸惑うことがあったが、今後看護師との連携が必要だと訴求し話を聞いていただいた。

(委員) 企業に対しても、教員が自信を持ってアピールしていかないといけない。看護職の魅力を訴求していけば良い。

(学校) 教員の意識改革をし、学生に伝えていきたいと考えている。

(委員) 学生の立場であれば、なぜタイトル「SDGs 活動」にしたのかと思う。地域との関与・リーダーシップ・チーム力高めたいということと、SDGs の言葉が一致せず、求めるものと社会的意義とのギャップがあると思う。看護でどう着地点を作るのかが大事である。

(委員) 新カリキュラムの「入退院支援・外来実習」での、教員研修はどのような学びだったのか。

(学校) 高槻病院と愛仁会リハビリテーション病院と井上病院で実施し、教育主事と科長が参加した。このフィールドで何を学べるのか、各病院の情報収集している状況である。

(委員) 外来には入退院の支援が多くあり、地域のつながりがあることを教員に理解してもらえれば、「SDGs 活動」にもつながるのではないかと。

(学校) 学生に地域とのつながりに関心をもってほしいことから始まったため、看護職に焦点を当てられていなかった。初回、3学年の話し合いが対面にてできず、役割を明確にできていなかったと感じる。学生の関心・気づきから、地域と関わる方法はないか、学校全体で取り組もうという発信を投げかけた。中間発表を通して、他のグループの取り組みを知ることで、自分のグループにも良い影響を与えてほしい。

(委員) 「看護学概論」から「SDGs 活動」につながっていると動機付けすれば良い。良い縦割り活動になると思う。

(学校) 看護職の部分を発信できていなかったのも、まとめの際に看護職の部分に落とし込み、持続させていきたい。

7. 各委員より総評

(委員) 画期的なカリキュラム改正になっている。患者のもとに看護を届けると考えると、今後地域が大事になってくる。視点を動かすことで、看護基礎教育に生かされてくる。最終的に整合性を確認する必要がある。

(委員) おもしろいカリキュラムであり、興味深かった。カリキュラム作成後の評価が大事であり、年度末に評価するための評価計画を立て、データを収集し次につなげていく必要がある。

「ヘルスプロモーション実習」のテーマは様々な年代・健康状態であり、「産業保健」の分野は一つのテーマであり、全体的なものを評価していく方向性を持ち、学校の狙いに合致させなければならない。

(委員) 「SDGs 活動」の着地点を明確にする必要がある。学生の背景を活かしながら、教科外活動を柔軟的に取り組んでほしい。

(委員) カリキュラム改正にあたり、会議で提案したことが新カリキュラムに反映されていた。愛仁会内での病院の特性を生かしながら、教員も現場を知り、現場も教育を知ることの大切さを発信していきたい。

(学校) 次に何に着目したら良いか、頂いた意見を参考にしながら今後も取り組んでいきたい。地域に根差した看護師を育てていくために、検討して取り組んでいきたい。

次回会議予定

日時 2023年7月で調整予定

場所 愛仁会看護助産専門学校 会議室

テーマ 未定

以上